

中島敦の「山月記」

目次

中島敦の「山月記」

- 一、第一章（隴西ろうせいの李徴りちようは…）
- 二、第二章（翌年かんなつぎよし、監察御史…）
- 三、第三章（今から一年程前…）
- 四、第四章（袁滲えんさんはじめ一行は…）
- 五、第五章（何故なぜこんな運命に…）
- 六、第六章（漸くあたり四辺の暗さが）
- 七、結び

※ 参考文献

中島敦の「山月記」

中島敦の『山月記』

例えば、中島敦の『山月記』という作品は、彼の作品の中では、最も有名な「作品」（短編小説）の一つであるが、それは、戦後、学校の教科書などにも載るようになってからだそうであり、その「原典」は、中国（宋朝）の『太平広記』や『古今説海』、また、中国（清朝）の説話集『唐人説薈』の中にある『人虎伝』などを元として書かれたものであり、その「内容」を一言で敢えて言えば、それは、まさに「人間が虎に変わってしまった」という、そのような、まさに現実にはあり難い怪奇な話でありながら、それでは、この「作品」の一体どこがどのように魅力的だというのだろうか？ その問題について、本文は「漢文調」であり、やや難しいが、少しばかり考えてみたいと思う。

*

*

まず、中島敦という人は、一九〇九年（明治四十二年）の五月に生まれている。この年は、有名な「太宰治」が生まれた年でもある。そして、父親は、旧制銚子中学校の漢文の教師であったという。一方、中島敦は、一九三三年（昭和八年）の三月に、東京帝国大学国文学科（つまり東大）を卒業して、その年の四月に、横浜の「女学校」の国語と英語の教師になっている。その後、一九四一年（昭和十六年）にはその職を辞して、パラオ南洋庁に教科書編纂掛として療養を兼ねて赴任するが、その年の十二月八日には「太平洋戦争」（真珠湾攻撃）が勃発し、その戦火が激化するなか、翌一九四二年（昭和十七年）十二月四日に、気管支喘息で満三十三歳の若さでこの世を去ってしまうのである。ちなみに、『山月記』という作品は、一九四二年（昭和十七年）に発表され、一方、『名人伝』という作品は、中島敦の死後に発表されたものである。

一、第一章

それでは、その『山月記』の冒頭の「文章」であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。いくばくもなく官を退いた後は、故山、號略に帰臥し、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴は漸く焦躁に駆られて来た。この頃からその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒らに炯々として、曾て進士に登第した頃の豊頬の美少年の倂は、何処に求めようもない」（本文）とある。

*

*

それでは、その「本文」の「内容」について考えてみたいと思うが、それは、次のような内容である。つまり、「……隴西の李徴という人は、博学（知識豊富で）才穎（才能に恵まれ）、天宝の末年（最後の年）、若くして名を虎榜（科挙に合格した者の名を記した札）に（自らの名）を連ね、ついで江南尉（江南の警察官の役職）に任命されたが、性（性格）は、狷介（頑固で自分の考えに固執して）、自ら恃むところ頗る厚く（自ら信じるところを固く守り、人の意見も聞かず）、賤吏（下級役人）に甘んずるを潔しとしない

(自らの信念に照らして受け入れることができ) なかった。いくばくもなく(やがて) 官を退いた後は、故山(故郷)、號略に帰臥(帰郷して、静かに暮ら)し、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた。下吏(下級役人)となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴は漸く焦躁(焦り)に駆られて来た。この頃からその容貌も峭刻(険しく)なり、肉落ち骨秀で(骨が出て)、眼光のみ徒らに炯々(ギラギラ)として、曾て進士に登第した頃(科挙に合格した頃)の豊類(ふつくらとした類)の美少年の倂は、何処に求めようもなかつた」とある。

さて、ここで最も大事なことの二つは、まず、「作者」(中島敦)という人は、いわば格調高い「漢文調」の表現によつて、まさに「文章の美しさ」そのものに深くこだわつた作家の一人であつたということである。次に、作品の主人公「李徴」という人は、博学才穎であり、科挙の試験にも合格して、その結果、江南尉(江南の警察官の役職)に任命されるが、彼は、生来頑固で、自ら恃むところ頗る厚く、他人(例えば上司)の言うことなどいぢいち素直に聞けるような性格ではなく、それゆゑ、地方の「下級役人」などに満足して、長く膝を俗悪な大官の前に屈するようなことはとてもできないということ、それよりは、むしろ「詩人」となつて、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたということである。これは、これで「一つの考え方」であり、彼自身、実際に「地方の役人」というものをわが身を以つて経験してみると、あらためて自分という人間は、とても「役人には向いていないなあ」というようなことを真にわが身に染みて「実感」したに違ひなく、だからこそ、やがて、その官を退いては、故郷(ふるさと)へと歸つて、静かに暮らし、そして、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つたということになるのだろう。……

それでは、李徴という人の、一体、どこに「判断の甘さ」というものがあつたのかと敢えて問えば、その一つは、まさに「人との交を絶つた」というところであり、詩家になろうとして、ひたすら詩作に耽つたことに何の問題もなく、問題なのは、「人との交を絶つた」というところであり、何も「人との交を絶つ」必要はなかつたのである。つまり、ひたすら詩作に耽つて「人との交を絶て」ば、どうしても「孤独」になりやすく、そのような「孤独」を長く続けることは、やがては彼の「精神状態」の中にいわば「神経衰弱」状態というようなものが生じてきて、精神が不安定になりやすいのである。

そして、この「神経衰弱」という問題は、一度は徹底的に考えてみなければならぬ問題の一つであり、なぜなら、明治時代以降、われわれ日本人の「作家」たちを真に苦しめて来たもの一つに、まさに「神経衰弱」という問題があるからである。——例えば、夏目漱石の「神経衰弱」は特に有名であるが、明治以降の日本人、いや、世界中の実に数多くの「知識人」たちが、この「神経衰弱」というものに、多かれ少なかれ、深く悩み苦しんでいるのである。それでは、その「神経衰弱」とは、一体、何かと敢えて問えば、それを今日の医学界の言葉で言えば、それは、いわば「うつ病」(或いは「躁鬱病」)に近いものであり、その「うつ病」という牢獄の「囚人」に陥りやすいということである。

例えば、若い時の小林秀雄という人は、ボオドレエルの『悪の華』という作品の「球体の中」に虫のように閉じ込められていたという。それは、ボオドレエルの『悪の華』に出て来る言葉を借りれば、まさに「……地上を好んで廢墟(虚無)と化し、欠伸の中に、世界を嘔む。これぞ、倦怠。——眼に思はずも涙を湛へ、長き煙管(思索)を煙らせて、断頭

台（死）の夢を見る。読者よ、君はこれを知る、この微妙なる怪物を……」ということになるわけだ。そして、それこそ、まさに「虚無の世界」（この世の意味や価値などがうすれて、しまう虚無主義的な世界）であり、若い時の小林秀雄という人の「精神状態」も、まさにそのような「精神状態」（つまり「神経衰弱」状態）になっていたのである。

そして、李徴という人の、もう一つの「判断の甘さ」としては、いわゆる「……文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなった」というところである。つまり、李徴自身、自分の「才能」にはかなりの自信を持っていたので、当然のことながら、何とかなるだろうと考えていただろうが、なかなかそう思うようにならなかった。もし「人との交を絶たず」に、色々な分野の人たちと親しく交わっていたら、恐らく、それらの人たちの「何らかの助け」によって、李徴という人は、やがては「世に出て、文名も揚り、そして、生活も安定した」に違いない。その「機会」を自ら放棄してしまっただけのことである。

* *
それでは、その次の「本文」であるが、それは、「……数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。曾ての同輩は既に遙か高位に進み、彼が昔、鈍物として歯牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才李徴の自尊心を如何に傷つけたかは、想像に難くない。彼は快々として樂まず、狂悖の性は愈々抑え難くなった。一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿った時、遂に発狂した。或夜半、急に顔色を変えて寢床から起上ると、何か訳の分らぬことを叫びつつそのまま下にとび下りて、闇の中へ駈出した。彼は二度と戻って来なかった。附近の山野を搜索しても、何の手掛りもない。その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった」（本文）とある。

* *
それでは、その「内容」であるが、それは、「……数年の後、ひどい貧しさに堪えられず、妻子の衣食のために遂に自分の節（考え）を曲げて、再び東へ赴き、一地方官吏（地方公務員）の職に就くことになった。一方、これは、己の詩業に半ば（半分は）絶望したためでもある。曾ての同輩は既に遙か高位（高い地位）に進み、彼が昔、鈍物（頭の働きの鈍い人）として歯牙にもかけなかった（無視して相手にもしなかった）その連中たちの下す命令を黙って受け従わなければならぬことが、往年（昔）の秀才李徴の自尊心をどれほど深く傷つけたかは、想像に難くない。彼は快々として（不平・不満ばかり）で樂まず、狂悖の性（常識を欠いたおかしな言動）なども、ますます抑え難くなった。そして、一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿った時、彼は、遂に発狂した。或る夜半、急に顔色を変えて寢床から起き上ると、何か訳の分らぬことを叫びつつそのまま下に飛び下りて、闇の中へ駈出した。彼は二度と戻って来なかった。附近の山野を搜索しても、何の手掛りもない。その後、李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった」とある。

つまり、数年後、李徴という人は、生活にひどく困窮し、それゆえ、一つは、「妻子の衣食」のため、一つは、自分の詩業に半ば（半分は）絶望して、遂に自分の考えを曲げて、再び、東の地へ赴き、一地方官吏（地方公務員）の職に就くことになった。ところが、かつての同輩たちは、既に遙か高い地位へと進み、彼が昔、愚鈍な人物たちとして無視し相手にもしなかった、その連中たちの下す命令を黙って受け従わなければならぬことが、

往年（昔）の秀才李徴の自尊心をどれほど深く傷つけたかは、想像に難くなく、それが、彼の「精神状態」をどんどん「うつろの脳」へと悪化させてしまい、彼は不平・不満ばかりで樂しまず、常識を欠いたおかしな言動なども、ますます抑え難く、むしろ増えるようになってしまった。そして、一年後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿った時、彼は、夜中、遂に発狂してしまった。急に顔色を変えて寢床から起き上ると、何か訳の分らぬことを叫びつつそのまま下に飛び下りて、闇の中へ駆け出し、彼は二度と戻って来なかった。附近の山野を搜索しても、何の手掛りもなく、その後、李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった」と続くのである。そして、ここでもう一度、「発狂」という言葉について考えてみたいと思う。

*

*

例えば、有名な芥川龍之介という作家は、その最晩年の『或阿呆の一生』という作品の中で、彼は、「……『或阿呆の一生』（いわば自分の一生）を書き上げた後、（中略）、彼は彼の一生を思ひ、涙や冷笑のこみ上げるのを感じた。彼の前にあるものは唯発狂か自殺かだけだった」とある。しかも、友人の宇野浩二という人が「発狂」したというようなことを聞いて、芥川龍之介自身、「……自分でも強度の神経衰弱よりして発狂するかも知れない」と冗談に語り、さらに、「……いや、自分は発狂する前に死ぬ」というような言葉さえ残しているのである。もちろん、芥川龍之介の「自殺」の理由には、実にいろいろな要因（数多く）があつたかと思うが、その一つには「こういう想い」もあつたということである。そして、この「神経衰弱」という問題をなげ敢えて再び取り上げるのかと言えば、前述のように、明治以降の日本人、いや、古今東西を問わず、世界中の実に数多くの「知識人」たちが、この「神経衰弱」というものに、多かれ少なかれ、深く悩み苦しんでいるという理由からであり、そして、もう一つの理由は、次のようなことである。

つまり、古今東西を問わず、世界中の実に数多くの「知識人」たちが、なぜ「神経衰弱」というものに、多かれ少なかれ、深く悩み苦しむようになるのかと敢えて問えば、それは、そのような人たちは、若い時には、自分でももう全く手に負えないほどのもの凄い「知識欲」（或いは「真善美欲」）などに襲われることになり、それゆえ、当然のことながら、無限に果てしなくどこまでも本格的な「思考（思索）活動」を何年も何十年も積み重ねるようになり、そうなると、今まではそうだと思つていたことも、実はそうではなく、それではこうなのかと次から次へとその「考え方」を新たにしていこううちに、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考え方なども空中分解して、もう何がなんだか自分でもよく分からないような世界に深く陥つてしまうわけである。それが、まさに「虚無の世界」であり、そのような「虚無の世界」（それは「この世の意味や価値などがうすれてしまう虚無主義的な世界」へと深く陥るとともに、それに必ず付随する「神経衰弱」という精神的な不安定な状態にもなり易いが、しかし、それらを踏み超えた先に、実は「内的成長」の一つの到達点があるということである。

二、第二章

さて、「物語」を前に進めたいと思うが、その「本文」は、次のようなものである。つ

まり、「……翌年、監察御史、陳郡の袁滂という者、勅命を奉じて嶺南に使し、遂に商於の地に宿った。次の朝未だ暗い中に出発しようとしたところ、駅吏が言うことに、これから先の道に人喰虎が出る故、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、今少し待たれたが宜しいでしょうと。袁滂は、しかし、供廻の多勢なのを恃み、駅吏の言葉を斥けて、出発した。残月の光をたよりに林中の草地を通って行った時、果して一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、あわや袁滂に躍りかかると見えたが、忽ち身を翻して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の声で『あぶないところだった』と繰返し呟くのが聞えた。その声に袁滂は聞き憶えがあった。驚懼の中にも、彼は咄嗟に思いあたって、叫んだ。『その声は、我が友、李徴子ではないか？』袁滂は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少かった李徴にとっては、最も親しい友であった。温和な袁滂の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかったためであろう」（本文）とある。

*

*

まず、この『山月記』という作品は、事実上、「二人の人物」が登場をして、あれこれ語るだけである。一人は、主人公の「李徴」であり、そして、もう一人は、彼のかつての親友「袁滂」という人である。この人は、主人公の「李徴」とは違って、温厚な性格であり、今や立身出世をして、まさに「監察御史」（それは「官吏の監察や地方を巡察して行政を監視する役」という高位の官職に就いていた。彼（袁滂）という人は、李徴が発狂して行方不明になった、その翌年、皇帝から直接の「命令」（勅命）を受けて、東の「嶺南」という地に遣わされた。その途の途中、（たまたま）商於という地で宿を取ったということである。そして、「……次の朝、未だ暗い中に出発しようとしたところ、駅吏（宿場役人）が言うことに、これから先の道に人喰虎が出るので、旅人は白昼でなければ、通れません。今はまだ朝が早いので、今少し待たれたが宜しかろうと云うのであった。しかし、袁滂は、お供の者が大勢なのを恃みにして、駅吏（宿場役人）の言葉を斥けて、出発してしまった。残月の光をたよりに林中の草地を通って行った時、果して（駅吏の言った通り）、一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。そして、虎は、あわや袁滂に躍りかかると見えたが、忽ち身を翻して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の声で、『あぶないところだった』と繰返し呟くのが聞えた。その声に袁滂は聞き憶えがあった。驚懼（驚き恐れ）の中にも、彼は咄嗟に思いあたって、叫んだ。『その声は、我が友、李徴子（子は尊敬）ではないか？』袁滂は李徴と同年に進士の第に登り（科挙に合格して）、友人の少かった李徴にとつては、最も親しい友であった。温和な袁滂の性格が、峻峭（厳しい）李徴の性情と衝突しなかったためであろう」となるのである。

*

*

そして、「……叢の中からは、暫く返辞が無かった。しのび泣きかと思われる微かな声時々洩れるばかりである。ややあって、低い声が答えた。『如何にも自分は隴西の李徴である』と。——袁滂は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久闊を叙した（久し振りに会って話をした）。そして、何故叢から出て来ないのかと問うた。李徴の声が答えて云う。自分は今や異類（虎）の身となつてゐる。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつ又、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起させるに決っているからだ。しかし、今、図らずも故人に遇うことを得て、愧赧の念（恥じて顔を赤らめる気持ち）をも忘れる程に懐かしい。どうか、ほんの暫くでいいから、我

が醜悪な今の外形を厭わず、曾て君の友李徴であったこの自分と話を交してくれないだろうか。——後で考えれば不思議だったが、その時、袁滲は、この超自然の怪異を、実に素直に受容れて、少しも怪もうとしなかった。彼は部下に命じて行列の進行を停め、自分は叢の傍に立って、見えざる声と対談した。都の噂、旧友の消息、袁滲が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかった者同志の、あの隔てのない語調で、それ等が語られた後、袁滲は、李徴がどうして今の身となるに至ったかを訊ねた。草中の声は次のように語った」（本文）とある。

*

*

この辺のところは、このままで十分であるが、李徴は、なぜ姿を見せないのかと敢えて問えば、それは、どうしておめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。また、必ず君に「畏怖嫌厭の情」（つまり「恐れ嫌がる情」）を起させるに決っているからとある。この「心理」というのは、例えば、その人の「容貌や境遇」その他などが酷く悪化してしまい、それゆえ、なるべく知人や友人その他の人にも「会いたくない」（或いは「知られたくない」というような「心理」に近い。それは、なぜか？、それは、結局、自分が「惨め」に思えるからである。ましてや、自尊心の人一倍強い「李徴」という人であれば、なおさらのことである。それでは、なぜ「袁滲」からすぐにも逃げ出さずに、話をしようとしているのだろうか？、ここが最も大事なところであるが、それは、主人公の「李徴」という人は、いわば「発狂」をして、なぜか「虎」へと変身して以来、彼は、ずっと誰とも話をしていないのである。それは、あまりにも長い「孤独」であり、一般に、あまりに長い「孤独」は、その人の「心」を狂わせるものである。だからこそ、「話し相手」というものが必要になるのである。われわれ人間の「精神」というものを健全に保つためにも、どうしても「話し相手」というものは必要不可欠になるといふことである。

しかし、それは、誰でもよいということではない。つまり、主人公の「李徴」という人は、かつての親友「袁滲」であればこそ、自分のこのような「身の上話」をしてもよいと思つたのである。——それは、一体、なぜなのか？、それは、まず、かつての親友「袁滲」と親しく「……都の噂、旧友の消息、袁滲が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかった者同志の、あの隔てのない語調で、それ等が語られた後、袁滲は、李徴がどうして今の身となるに至ったかを訊ねた」とある。その時、主人公の「李徴」という人は、かつての親友「袁滲」という人は、今や「監察御史」（それは「地方を巡察して行政を監視する役」といふ高位の官職に就いていながらも、（自分を少しも見下げることもなく）、あの頃と少しも変わらない彼のその「人間性」を見て、まさに（心の底から）「人間として信頼できる人物」と見て取つたということである。——つまり、「袁滲」ならば、人間として信用できる、信頼してもよい。だからこそ、しばしのためらいのあと、自分のこのような「身の上話」をしてもよいと思つたのである。そして、主人公の「李徴」という人は、次のように語るのである。

三、第三章

それは、「……今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊つた夜のこと、一睡してから、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見

ると、声は闇の中から頻りに自分を招く。覚え、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走っていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行った。気が付くと、手先や肱のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなつてから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となっていた。自分は初め眼を信じなかった。次に、これは夢に違いないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあつたから。どうしても夢でないと悟らねばならなかつた時、自分は茫然とした。そうして懼れた。全く、どんな事でも起り得るのだと思つて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になつたのだろう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。自分は直ぐに死を想つた。しかし、その時、眼の前を一匹の兎が駆け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の人間が目を覚ました時、自分の口は兎の血に塗れ、あたりには兎の毛が散らばつていた。これが虎としての最初の経験であつた。それ以来今までにどんな所行をし続けて来たか、それは到底語るに忍びない(本文)とある。

*

*

さて、この「告白」部分は、まさに書いてある通りであるが、まず、「……(深夜)、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の中から頻りに自分を招く。覚え、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走っていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行った。気が付くと、手先や肱のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなつてから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となつていた」とある。これは、まさに「……人間から虎へと変身していく過程」を、その実に事細かな「心身の変化」過程を、まるで自ら「実況中継」しているような描写になっている。

それでは、一体、誰が「我が名」を呼ぶのだろうか？ それは、例えば、何らかの「薬物中毒」などで自分の「精神」に異常を来したような時には、よく「幻聴・幻視」などを経験することがあると聞く。——つまり、まさに「精神」に異常を来たして、何らかの「幻聴・幻視」などを見聞きし、その「声(や姿)」などに導かれて、わけも分からず、その「声(や姿)」などを追うて走り出すこともあるのかも知れない。もちろん、その身が「虎」に変身するようなことはないが。……例えば、酒を浴びるほど飲んで「泥酔」状態に深く陥った人がいて、その人は、その後の「記憶」が完全に消えて、気がつく、(つまり「人間に戻る」と)、自分はベットの上に寝かされていたというようなことは、よく経験することではないかと思う。そして、自分はこうしてここにこうしているのかと尋ねた時に、相手の人は、「……昨夜は、あれから大変だったんだから、とにかく、わけもなく、大声で叫んだり、また、暴れまわったりして、もうどうにも手に負えないほどの『大虎』だったんだから、覚えてないの？」と云つたとする。その場合、その人は、まさに「……人間から人間ではなくなる精神状態」を実際に経験していたことになるのだろう。つまり、人間が人間でなくなる一つは、すなわち、過去の「記憶」が消えてしまうということである。

例えば、誰もがよくご存知の、いわゆる「記憶喪失」というものがある。それは、一体、

どのようなものかと問えば、それは、自分の「過去の記憶」が思い出せないという状態であり、そうすると、その人は、「……ここはどこ？ わたしはだれ？」という精神状態に深く陥りやすいということである。つまり、われわれ人間というのは、ふつうであれば、二、三才の頃からの「記憶」とともに、今日まで生きてきた「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全思い出、その他」）の実に膨大な量の「蓄積」の中から、もう何があっても絶対に思い出すことの出来ないものと、一方、何とか思い出せるような膨大な量の過去の「記憶の蓄積」が誰にもあるわけである。そして、その膨大な過去の「記憶の蓄積」があればこそ、自分は、今日までどのように生きてきて、そして、どのような性格の人間であるかなどの、まさに「自己認識」というものは、初めて可能になるということである。それゆえ、そのような膨大な過去の「記憶の蓄積」が思い出せないような精神状態になってしまうと、まさに「……ここはどこ？ わたしはだれ？」という精神状態に深く陥りやすくなるのである。——つまり、われわれ人間が人間でなくなるという「確たる根拠」としての、その一つは、まさに人間としての「ものを考える能力」がどんどん低下していくことと、もう一つは、その人の膨大な過去の「記憶の蓄積」がどんどん薄れていくということであり、その一つの有名な具体的な「実例」としては、まさに「痴呆症」という病気があるということである。もちろん、主人公の「李徴」という人は、いわゆる「痴呆症」ではないが、しかし、精神面では、その「痴呆症」（特に「若年性痴呆症」）に近いような「精神状態」を実際に経験しているということである。

そして、次に「興味深い」のは、次の言葉（文章）であり、それは、「……全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になったのだろう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ」というところである。この「文章」が、なぜ「興味深い」のかと言えば、それは、次のようなことである。——まず、われわれ人間というのは、両親の「遺伝子」を半分ずつ受け継いで、この世に生まれて来る。それは、今日ではよく知られていることだが、しかし、それでは具体的に自分の一つ一つの「目、鼻、口、耳、その他の顔全体、また、腕、手、脚、足、指、その他」、つまり、自分の「容姿・容貌」が一体どうしてこういう「姿・形」であるのかを初めとして、なぜ、どうして自分はこのような「病気や事故或いはまた境遇や出来事、その他」などにめぐり遭わなければならないのか？ そのような「理由」については、ある程度までは推察でき得るとしても、しかし、厳密にはよく分らないものである。つまり、「……全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になったのだろう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ」ということにもなるのである。——つまり、われわれの「容姿・容貌」を初めとして、なぜ、どうして自分はこのような「病気や事故或いはまた境遇や出来事、その他」などにめぐり遭わなければならないのか？ そのような「理由」については、ある程度までは推察でき得るとしても、しかし、厳密にはよく分らないものである。

*

*

それでは、次の「本文」であるが、それは、「……ただ、一日の中に必ず数時間は、人間の心が還つて来る。そういう時には、曾ての日と同じく、人語も操れば、複雑な思

考にも堪え得るし、経書の章句を誦んずることも出来る。その人間の心で、虎としての己の残虐な行のあとを見、己の運命をふりかえる時が、最も情なく、恐しく、憤ろしい。しかし、その、人間にかえる数時間も、日を経るに従って次第に短くなって行く。今までは、どうして虎などになったかと怪しんでいたのに、この間ひよいと気が付いて見たら、己はどうして以前、人間だったのかと考えていた。これは恐しいことだ。今少し経てば、己の中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋れて消えて了うだろう。ちようど、古い宮殿の礎が次第に土砂に埋没するように。そうすれば、しまいに己は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い廻り、今日のように途で君と出会っても故人と認めることなく、君を裂き喰うて何の悔も感じないだろう。一体、獣でも人間でも、もとは何か他のものだったんだらう。初めはそれを憶えているが、次第に忘れて了い、初めから今の形のものだったと思ひ込んでいたのではないか？ いや、そんな事はどうでもいい。己の中の人間の心がすっかり消えて了えば、恐らく、その方が、己はしあわせになれるだろう。だのに、己の中の人間は、その事を、この上なく恐しく感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思っているだろう！ 己が人間だった記憶のなくなることを。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上になった者でなければ。ところで、そうだ。己がすっかり人間でなくなつて了う前に、一つ頼んで置きたいことがある」(本文)と云うのであった。

*

*

さて、主人公の「李徴」という人は、今や、その身は「虎」へと変身している。「……ただ、一日の中に必ず数時間は、人間の心が還つて来る。そういう時には、曾ての日と同じく、人語も操れば、複雑な思考にも堪え得るし、経書の章句を誦んずることも出来る。その人間の心で、虎としての己の残虐な行のあとを見、己の運命をふりかえる時が、最も情なく、恐しく、憤ろしい。しかし、その、人間にかえる数時間も、日を経るに従って次第に短くなって行く。今までは、どうして虎などになったかと怪しんでいたのに、この間ひよいと気が付いて見たら、己はどうして以前、人間だったのかと考えていた。これは恐しいことだ」とある。——例えば、これは、余談になるが、NHKの教育テレビの『スーパープレゼンテーション』という番組の中で、何年か前に、ある女性が次のような話をしているのを聞いたことがある。それは、次のような内容のものである。

まず、その女性は、左脳に大きな障害がある人であり、そして、その「左脳」が健全に機能している間は、まさに「……曾ての日と同じく、人語も操れば、複雑な思考にも堪え得るし、経書の章句を誦んずることもでき得る」状態であるが、しかし、だんだんと「左脳」の機能が衰えて来ると、今まで事細かなことまではつきりと「区別」でき得ていたものが、だんだんと区別が出来なくなつて、あいまいになつていき、そして、最後には、自分が誰であるのかという認識すら出来なくなつてしまひ、すべてがあいまいになつてしまふのだ」と流暢に語っているのである。それは、一体、どのようなことを意味するのかと言へば、それは、結局、「左脳」の機能が限りなく低下してしまひ、最後は、まさにほとんど「右脳」だけになつてしまつたという状態に近いのである。そして、われわれ人間の「脳」の働きが、例えば、いわば「右脳」だけになつたような状態の時には、一体、どのような状態になるのかと言へば、その女性の「話」では、つまり、「……自分が誰であるのかという認識すら出来なくなつてしまひ、すべてがあいまいになつていく」と、その

人の「精神状態」というのは、意外にも、実に「……平和で、おだやかで、全体と調和をして、不安というものは消えて、幸せな気分になっていた」というのである。

一方、「左脳」の機能が回復してくると、今まで「すべてが曖昧であつた状態」から、だんだんと色々なものが「区別」でき得るようになって来て、やがて、本来の「人間らしい思考」もでき得るようになるという話でした。——例えば、われわれ人間というのは、一般的に、人間以外の他の動物たちをなぜか「人間より遙かに不幸な存在である」ととかく思いがちであるが、しかし、いわゆる「本能的部分」に強く支配されている人間以外の他の動物たちというのは、意外に人間よりも「幸せな精神状態」にあるのかも知れない。

例えば、その「本文」のなかにも、「……今少し経てば、己の中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋れて消えて了うだろう。ちようど、古い宮殿の礎が次第に土砂に埋没するように。(中略)、己の中の人間の心がすっかり消えて了えば、恐らく、その方が、己は、あわせになれるだろう。だのに、己の中の人間は、その事を、この上なく恐しく感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思っているだろう！ 己が人間だつた記憶のなくなることを。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上になった者でなければ……」とある。

まず、本文の「古い宮殿の礎」というのは、まさに「人間の心」(或いは「過去の記憶」ということであり、また、それが次第に「土砂に埋没する」とは、すなわち、「獣の心」(或いは「獣としての習慣」)などに支配されて、「人間の心」(或いは「過去の記憶」)が消えてしまうということである。それでは、なぜ、「……その方が、己は、あわせになれるだろう」と言っているのだろうか？ それは、「人間の心」に戻ると、本文では、「……その人間の心で、虎としての己の残酷な行のあとを見、己の運命をふりかえる時が、最も情なく、恐しく、憤ろしい」というように、実に色々と思ひ苦しみ、むことになるからである。それゆえ、むしろ「人間の心」が完全に消えてしまったほうが、かえつて、「そのようなことで思ひ苦しみむことがなくなる」からである。

それでは、なぜ、「……だのに、己の中の人間は、その事を、この上なく恐しく感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思っているだろう！ 己が人間だつた記憶のなくなることを。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上になった者でなければ……」とある。もちろん、この「気持ち」は、人間として余りにも当然な「気持ち」ではあるが、その「気持ち」を誰よりも真に深くわが身に感じて実感としてよく理解でき得る人たちがいるとすれば、それは、恐らく、まさに「痴呆症の人たち」(特に「若年性痴呆症の人たち」)かも知れない。——それは、なぜかと言え、それは、自分はまだこんなに若いのに、なぜ、どうして、という気持ちであり、それは、人間としての「ものを考える能力」がだんだんと低下していくという恐怖とともに、人間としての過去の膨大な「記憶の蓄積」がだんだんと薄れていくというような恐怖を、まさに「実感」しているからである。そして、主人公の「李徴」という人は、「……己がすっかり人間でなくなつてしまふ前に、一つ頼んで置きたいことがある」と云うのであつた。

四、第四章

それでは、次の「本文」であるが、それは、「……袁滲はじめ一行は、息をのんで、叢中の声の語る不思議に聞入っていた。声は続けて言う。——他でもない。自分は元来詩人として名を成す積りでいた。しかも、業未だ成らざるに、この運命に立至った。曾て作るところの詩数百篇、固より、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在も最早判らなくなつていよう。ところで、その中、今も尚記誦せるものが数十ある。これを我が為に伝録して戴きたいのだ。何も、これに仍つて一人前の詩人面をしたくないのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えたいのでは、死んでも死に切れないのだ。——袁滲は部下に命じ、筆を執つて叢中の声に随つて書きとらせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁滲は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠けるところがあるのではないか」（本文）とある。

*

*

さて、この「章」で特に興味深いのは、次の「文章」であり、それは、「……自分は元来詩人として名を成す積りでいた。しかも、業未だ成らざるに、この運命に立至った。曾て作るところの詩数百篇、固より、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在も最早判らなくなつていよう。ところで、その中、今も尚記誦せるものが数十ある。これを我が為に伝録して戴きたいのだ。何も、これに仍つて一人前の詩人面をしたくないのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えたいのでは、死んでも死に切れないのだ」とある。

つまり、主人公の「李徴」という人は、詩人として「名を残す」ことが、何よりも「第一の願い」であった。それは、冒頭の「本文」のところでも、まさに「……詩家としての名を死後百年に遺そうとした」とある通りである。そのためにもこそ、主人公の「李徴」という人は、「……地方の役人の職を辞して、故郷に帰り、人との交わりを絶つて、ひたすら詩作に耽つた」ということである。ところが、道なかばで発狂して「虎」に変身してしまった。しかし、かつてそのようにして生み出した「詩」の数は百篇あるが、未だ世間に「発表」（公表）されていないままである。——ところで、その中に、今でも尚「記誦せるもの」（それは「記憶していて、暗唱しているもの」）が数十ある。これを我が為に「伝録」（記録し、伝え）て戴きたいというのが、主人公「李徴」という人の、まさに「切なる（心の底からの）願い」なのである。何も、これに仍つて一人前の詩人面をしたいのではない。作の巧拙（良し悪し）は自分では分からないが、とにかく、財産を破綻させ、妻子に貧窮の「苦しみ」まで味わせ、さらにわが身の心まで「狂わせ」（発狂させるまで）自分が生涯それに執着したところのもの、つまり、すべてを投げ捨ててまでひたすら詩作に耽つて生み出した詩数百篇、その一部なりとも後代に伝えたいのでは、（自分はもう）死んでも死に切れない」という想いである、と云うのであった。……

一方、「袁滲」という人は、その「李徴」の心の底からの「願い」を快く受け入れては、「……部下に命じ、筆を執つて叢中の声に随つて書きとらせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁滲は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。成程、

作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠けるところがあるのではないかと
思うのであった。それは、一体、なぜか？ それを敢えて一言で言えば、それは、どこか「人間性に欠るところがある」ということになるのだろう。或いは、「作品」そのものこそ、第一であり、一方、「名が残る残らない」は、結果に過ぎず、その「名を残す」ということにこだわり過ぎて、いかにも知れない。それをもちと分かりやすく言えば、あまりに「自分のことばかりにとらわれ過ぎて、いる」ということである。

例えば、「詩境」に深く溶け込んでいるような時には、ふだんの様々な「欲望や感情」などに振りまわされている雑然とした「自我」の状態から離れて、より密度の高い、それだけ自分自身になりきれている「純粹自己」の状態になっているような時であり、それは、例えば、学者でも、芸術家でも、文筆家でも、詩人でも、その他、どのような分野の誰であつてもよいわけだが、何か本格的な「思考（思索）活動」や何らかの「創作活動」などに深く溶け入っているような時にこそ、まさに「より密度の高い」（それだけ自分自身になりきっている「純粹自己」の状態になっていて、そのような時には、あまり疲れを感じない。それは、尋常ならぬエネルギーが全身に満ちて来るからであり、この時ほど自分自身になりきって生きている時はなく、まったくの「自足状態」に近いものである。そして、そのような一種の「没我的状態」になって、本格的な「思考（思索）活動」や「創作活動」などどこまでも深く溶け入っているような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」というようなものは、生じやすくなり、何か自分の「力（力量）」以上の真に優れた「芸術作品」などが生み出されたり、また、未だ人類によって解明されていないような様々な物事の「真実、真理、その他」などが、その人の「思惟界」で観て取れることが、非常に多くなるということである。——例えば、晩年のゲーテも、「……偉大なものは、ひたむきで、純真で、夢遊病者のような創造力によってのみ産み出されるものである。」（『ゲーテとの対話』下）という言葉を残しているが、この言葉なども、まさに超「自我」の状態からこそ、真にすぐれたものが生み出されるということを表現しているものである。

*

*

それでは、その次の「本文」であるが、それは、次のようなものである。「……旧詩を吐き終った李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るが如くに言った。羞しいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、己は、己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれて、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわって見る夢にだよ。嗤ってくれ。詩人に成りそこなって虎になった哀れな男を。（袁滲は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いていた）。そうだ。お笑い草ついでに、今の懐いを即席の詩に述べて見ようか。この虎の中に、まだ、曾ての李徴が生きているしるしに。」

袁滲は又下吏に命じてこれを書きとらせた。その詩に言う。

偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵 当时声跡共相高

我為異物蓬茅下 君已乘軺氣勢豪

此夕溪山对明月 不成長嘯但成皐

時に、残月、光冷やかに、白露は地に滋く、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げていた。人々は最早、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄倖を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

*

*

まず、主人公の「李徴」という人は、なぜ、どうして「……旧詩を吐き終ったあと、突然調子を変えて、自らを嘲るが如くに言う」ような「精神状態」へと変化したのだろうか？ それは、次のようなことである。——つまり、主人公の「李徴」という人は、道なかばで發狂して「虎」に変身してしまった。それゆえ、自分はこのまま「虎の身」としてただ死んでいくだけなのかと、密かに「懼れ、嘆き、孤独、深く悩み苦しん」でいたのである。ところが、たまたま若い頃の親友であった「袁滲」という人が、その途を通りかかることで、久しぶりに親しい「人間」（つまり「袁滲」にめぐり逢えたとともに、その「袁滲」と親しく「……都の噂、旧友の消息、その他、青年時代に親しかった者同志の、あの隔てのない語調で、それ等が語られた後」で、主人公の「李徴」という人は、なぜ、このような「身上」になったのか、その「経緯」を事細かに語ってから、自分がすっかり人間でなくなってしまう前に、一つだけお願いがあるということ、それは、もともと詩人として「名を残そう」として、かつて生み出した詩数百篇があり、その一部なりとも後代に伝えたいでは、（自分は今も）死んでも死に切れない」という想いを語るののである。そこで、「袁滲」という人は、その「願い」を快く受け入れては、「……部下に命じ、筆を執つて叢の中から朗々と響いた詩を書きとらせるのである。長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである」とある。これによって、自分の「詩」が後代に残る可能性が出て来たということである。

だからこそ、まさに「……旧詩を吐き終った」あと、一気に「心が解放」されて、その「心の解放感」からこそ、突然調子を変えて、自らを嘲るが如くに云うのである。それは、「……羞しいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、己は、己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれている様を、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわって見る夢にだよ。嗤つてくれ。詩人に成りそこなって虎になった哀れな男を」となるのである。——しかし、ここにこそ（つまり「自分の詩集が長安風流人たちの机の上に置かれていて、それが読まれている様こそ」）は、まさに主人公「李徴」が最初からずっと「頭の中」（或いは「心の中」）で想い描いていた「夢」そのものであり、それこそは、まさに「……詩家としての名を死後百年に遺そうとした」という言葉の具体的な「真意」になるのである。

一方、親友「袁滲」という人は、「……昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いていた」とある。それは、この詩人の「性格と数奇な運命」を思ったということであるが、一方、「李徴」は、「……そうだ。お笑い草ついでに、今の懐いを即席の詩に述べて見ようか。この虎の中に、まだ、曾ての李徴が生きているしに」ということで、次のような「七言律詩」を即興で創り出し、そして、袁滲は又下吏に命じてこれを書きとらせるのであった。

偶狂疾に因りて殊類と成る
今日の爪牙 誰か敢て敵せん
災患相仍つて 逃るべからず
当時の声跡 共に相高し

我異物と為りて 蓬茅の下 君已に韜に乗じて 氣勢豪なり
此の夕べ 溪山 明月に對し 長嘯を成さず 但だ阜を成す

たまたま心を病んで狂気となるにより、けものになつてしまつた。
いろいろな災患が重なり、この運命から逃れることができない。

爪や牙を持つ虎の身となつた今では、誰が敢えて刃向かうだろうか。
当時、あの頃の二人の評判は、ともに秀才として讃えられたものだ。
ところが、今、自分はけもの身となつて草むらに隠れ、

君はすでに出世して車に乗り、その権勢は頗る高いものがある。

この夕べ、谷川や山々を明るく照らす満月に向き合い、

自分は詩を吟ずることなく、ただ悲しく吠え叫ぶのみである。

時に、残月、冷やかに光り、白露は地にみちて、樹々の間を渡る冷たい風は、すでに暁の近いことを告げていた。人々は最早、事の不思議さを忘れて、肅然（静かに整然）として、この詩人の「薄倖」を嘆いた。李徴の声は、さらに続くのであつた。

五、第五章

李徴は、「……何故こんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考えよ
うに依れば、思い当ることが全然ないでもない。人間であつた時、己は努めて人との交
を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといつた。実は、それが殆ど羞恥心に近いもので
あることを、人々は知らなかつた。勿論、曾ての郷党の鬼才といわれた自分に、自尊心
が無かつたとは云わない。しかし、それは臆病な自尊心ともいうべきものであつた。己
は詩によつて名を成そうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨
に努めたりすることをしなかつた。かといつて、又、己は俗物の間に伍することも潔し
としなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。己の珠に非
ざることを惧れるが故に、敢て刻苦して磨くことも出来なかつた。己は次第に世と離れ、人と遠
ざることが、碌々として瓦に伍することも出来なかつた。己は次第に世と離れ、人と遠
ざかり、憤悶と慙恚によつて益々己の内なる臆病な自尊心を飼ふとらせる結果にな
つた。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だといふ。己の場
合、この尊大な羞恥心が猛獣だつた。虎だつたのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友
人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了つたのだ。
今思えば、全く、己は、己の有つていた僅かばかりの才能を空費して了つた訳だ。人生は
何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句
を弄しながら、事実は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭
う怠惰とが己の凡てだつたのだ。己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを專一に
磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもいるのだ。虎と成り果てた今、己は
漸それに気が付いた。それを思うと、己は今も胸を灼かれるような悔を感じる。己には
最早人間としての生活は出来ない。たとえ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作つた
にしたところで、どういふ手段で発表できよう。まして、己の頭は日毎に虎に近づいて行

く。どうすればいいのだ。己の空費された過去は？ 己は堪らなくなる。そういう時、己は、向うの山の頂の巖に上り、空谷に向って吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたのだ。己は昨夕も、彼処で月に向って咆えた。誰かにこの苦しみを分つて貰えないかと。しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮っているとしたか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持を分つてくれる者はない。ちょうど、人間だった頃、己の傷つき易い内心を誰も理解してくれなかったように。己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない（本文）とある。

*

*

さて、この「第五章」こそ、「作者」（中島敦）という人の彼自身の「考え方」がはっきりと表れているところであるが、その前に、原典の『人虎伝』を見てみたいと思う。

まず、原典の『人虎伝』という作品の中では、「……隴西の李徴は、皇族の子なり」とある。そして、博學で、立派な詩も書き、天宝十年、科挙に合格をして、やがて、江南尉になっていく。それゆえ、自尊心も高く、性格も荒つぽく、才能を恃んで倨傲（おごり高ぶり）、低い官職に屈することができず、つねに鬱鬱（不平不満）を抱いて樂しまず、同じ役所の会合で、宴もたけなわになるといつも、私が君たちの仲間になれるだろうか、と言っていたので、同僚の人たちからは、憎まれていたのである。こういう「性格」が、いわば「虎」へと変身する一つの「要因」にもなっているのだろう。……

次に、「……我に旧文数十篇有り。（中略）、君我が為に伝録せば、誠に文人の口闕に列すること能はざるも、然れども亦子孫に伝ふるを貴ぶなり」とある。つまり「……旧詩数十篇あるが、君がもし私のために伝録（記録し伝えて）くれれば、文人の仲間に加わることはできなくとも、子孫に伝えることができるのを貴ぶのである」とある。つまり、『人虎伝』の中の「李徴」という人は、詩人として「名を残す」ということ、つまり、「……詩家としての名を死後百年に遺そう」というような想いは全くないのであり、ただ、自分の「子や孫」のために数十篇の「詩」を遺すことができれば、それでよいということである。

最後に、原典の『人虎伝』の中の「李徴」という人は、なぜ、自分は「虎」へと変身したのかという「理由」付けについては、「……南陽の郊外に於いて、かつて一孀婦に私す。其の家竊かに之を知り、常に我を害する心有り。孀婦は是に由りて再び合ふを得ず。吾因りて風に乗じて火を縦ち、一家数人、尽く之を焚き殺して去る。此れを恨みと為すのみ」とある。その「内容」は、「……かつて私は南陽の郊外で一人の未亡人と密通をしていた。その家の人は竊かにこのことを知って、いつも私を殺害しようとしていた。未亡人は、これにより（私と）二度と会うことはできなかつた。そのために、私は、風に乗じて家に火を放つて、一家数人すべて焼き殺して逃げたのである。このことを残念に思うのみ」という内容になっている。これは、一家数人すべて焼き殺すという人間として極めて「非道かつ残酷な行爲」であり、その「報い」として、いわば「虎」へと変身してしまったという、そういう、いわば「因果応報」的な内容になっているのである。

*

*

一方、『山月記』の「作者」（中島敦）の場合は、まず、隴西の「李徴」は、「皇族の子」ではなく、むしろ「一般人」に設定を変えている。それは、一体、なぜか？ それは、特定の「人間」（皇族）ではなく、多くの人達にあてはまる「物語」に設定し直しているの

である。次に、『山月記』の「李徴」という人は、詩人として「名を残す」ことが、何よりも「第一の願い」であり、それは、まさに「……詩家としての名を死後百年に遺そうとした」とある通りである。そのためにこそ、主人公の「李徴」という人は、「……地方の役人の職を辞して、故郷に帰り、人との交わりを絶って、ひたすら詩作に耽った」ということである。ところが、道なかばで発狂して「虎」に変身してしまった。しかし、かつて生み出した「詩」の数は百篇あり、その中に、今でも覚えている詩が数十ある。これを我が為に「伝録」（記録し伝えて）頂きたいというのが、主人公「李徴」の心の底からの「願い」であり、それは、財産を破綻させ、妻子に貧窮の「苦しみ」まで味わせ、さらにわが身の心まで「狂わせ」（発狂させるまで）自分が生涯それに執着したところのもの、つまり、すべてを投げ捨ててまでひたすら詩作に耽って生み出した詩数百篇、その一部なりとも後代に伝えないでは、（自分はどう）死んでも死に切れないという想いなのである。

そして、もう一つ、原典の『人虎伝』とその内容が全く全然違っているのは、一体、何かと問えば、それは、なぜ、自分は「虎」へと変身したかの「理由」付けであるが、しかし、その「違い」こそは、まさに「中島敦」という作家がこの『山月記』という作品の中で「最も言いたかった」ことであり、それをもっと敢えて言えば、結果として、この「章」が書きたくて、『山月記』を書いたと言ってもよいくらいである。そして、この「三つ」以外は、基本的には原典の『人虎伝』とそれほど変わるところはないのである。

*

*

それでは、その「本文」を順を追って考えてみたいと思うが、それは、次のようなものである。つまり、「……何故こんな運命になったか判らぬと、先刻は言ったが、しかし、考えように依れば、思い当ることが全然ないでもない。人間であった時、己は努めて人の交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといった。実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった」とある。まず、ここまでを考えてみたいと思うが、主人公の「李徴」という人は、なぜ、自分は「努めて人との交を避けてきた」かと言えば、人々はそれを「倨傲だ、尊大だ」と言ったが、しかし、実際は、それが殆ど「羞恥心」に近いものであった、と素直に告白している。——例えば、「太宰治」という人は、自分の「人間への恐怖心」（人間恐怖）を隠すために、自分は「道化」を演じていたと素直に告白している。つまり、心の中の「本当の自分」（臆病な自分）を隠すため（知られないため）に、表面的には「道化」や「無頼漢」、その他を装っていたということである。

一方、主人公の「李徴」という人は、「羞恥心」から、まさに「人との交を努めて避けてきた」とある。この「羞恥心」というのは、辞書では「恥ずかしく感じる気持ち」とあるが、例えば、有名な「人見知り」というのは、まさに「警戒心や恐怖心」などから生じて来るものであり、また、例えば、それは、どういうことであれ、自分の「……容姿・容貌、身分、家柄、学歴、職歴、収入、年齢、能力、成績、言動、境遇、結果、その他」、何であれ、それが劣っていると感じるような時には、いわば「恥ずかしいと思う気持ち」（或いは一種の「劣等感」）などが生じやすくなると共に、そのような「羞恥心」というものは、その人が積極的に「活動」（言動）することや、また、人と積極的に交わることなどを妨げる「一つの要因」にもなり得るが、また、一方では、「……不平、不満、怒り、嫌悪、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」の感情を生み出す「一つの要因」にもなり、また、時には「過激な行動」（言動）などへと駆り立てる、「一つの要因」にも

なり得るものである。——つまり、われわれ人間というのは、結局、誰であれ、多かれ少なかれ、自分が「傷つくこと」を何よりも恐れているということである。

*

*

それでは、その次の「本文」であるが、それは、「……勿論、曾ての郷党（郷里）の鬼才といわれた自分に、自尊心が無かったとは云わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいべきものであった。己は詩によって名を成そうと思いつながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交って切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。かといって、又、己は俗物の間に伍する（仲間となる）ことも潔しとしなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。己の珠に非ざることを惧れるが故に、敢て刻苦して磨こうともせず、又、己の珠なるべきを半ば（半分）信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかつた」とある。

まず、右の「本文」の中の「自尊心」という言葉であるが、この「自尊心」という言葉には、大きく二つの「意味合い」があり、その一つは、「自分の存在自体を大事に思う気持ち」というものであり、そして、もう一つは、「自分の思想や言動或いは文学や芸術その他」などに自信をもち、他からの干渉を排除する態度」というものである。——例えば、動物には、「快・不快」の大原則があるが、それは、「……自分にとって心地よいものは受け入れ、自分にとって不快なものは拒絶する」というものであり、これなどは、「自分を大事に思う気持ち」からであり、また、われわれ人間には、「……ほめられればうれしいし、けなされれば腹が立つ」という大原則もある。つまり、「ほめられる」とは、すなわち、「自分の存在や才能が認められた」ということであり、また、「けなされる」とは、すなわち、「自分の存在や才能が否定された」ということである。その場合、「自分の存在」がけなされれば、「自分を大事に思う気持ち（自尊心）」が傷つけられ、また、「自分の才能や能力」などがけなされれば、それは、まさに「自分の自尊心が傷つけられた」ということになるのである。——例えば、自分の「思想や言動或いは文学や芸術その他」、何であれ、それらを他人からぼろくそに言われれば、それこそ、烈火の如く、「激しく怒り狂う」のも、まさに「自分の自尊心が深く傷つけられた」という理由からである。それらどちらであれ、そのような時には、相手に対する「……不平、不満、怒り、嫌悪、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」の感情などが生じ易くなるということである。——つまり、人間も動物も本来自分が「傷つく」ことを何よりも厭がっているのである。

次に、有名な「臆病な自尊心」という言葉であるが、この「言葉」をもっと分かりやすく表現し直せば、それは、一方では何らかの「自信」（自負心）から「おごり高ぶり」ながらも、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自分」ということであり、例えば、主人公の「李徴」という人も、まさに「一方では自負心からおごり高ぶり、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自分」から、まさに「人との交を努めて避けてきた」ということになるのである。また、もう一つの「尊大な羞恥心」という言葉も、その「言葉」をもっと分かりやすく表現し直せば、それは、まさに外的には、何らかの「自信」（自負心）から尊大（おごり高ぶった強い態度）を見せながら、一方、内面では、自分の「羞恥心」（それは「傷つきやすい心」）をも隠し持っていて、そのために、主人公の「李徴」という人は、「……己は詩によって名を成そうと思いつながら（一流の詩人にな

ろうと志を立てながら)、進んで師に就いたり、求めて詩友と交って切磋琢磨するような努力を怠ってしまった。かといって、又、己は俗物の間に伍する(それは「こんな俗物や凡才な人たちと交わり仲間となる」)ことも潔しとしなかった(自分の自尊心が許さなかった)。共に、我が「臆病な自尊心」(それは「一方では自尊心からおごり高ぶり、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自分」と、「尊大な羞恥心」(それは「自信《自負心》からおごり高ぶった尊大な態度を見せながらも、自分の心の中にはいつも傷つきやすい羞恥心も同時に隠し持っていた」)所為である。己の珠に非ざることを(自分には詩の才能がないのではないかと)惧れるが故に、敢て刻苦して磨こうともせず(進んで師や詩友と交わり切磋琢磨して詩の才能をさらに磨き上げようとする努力を怠り)、(その結果、真に傑出した詩家とはなり得なかった)。又、己の珠なるべき(自分には詩の才能があること)を半ば(半分は)信ずるが故に(その自負心から)、まさに「おごり高ぶり」、碌々として瓦に伍すること(同じく「こんな凡庸・凡才な人たちと交わり仲間となること」)も自分には、どうしても出来なかったということである。

*

*

それゆえ、「……己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによって益々己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了ったのだ。今思えば、全く、己は、己の有っていた僅かばかりの才能を空費して了った訳だ。人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、事実は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己の凡てだったのだ。己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者が幾らでもいるのだ。虎と成り果てた今、己は漸それに気が付いた。それを思うと、己は今も胸を灼かれるような悔を感じる。己には最早人間としての生活は出来ない。たとえ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしろ、どういう手段で発表できよう。まして、己の頭は毎日に虎に近づいて行く。どうすればいいのだ。己の空費された過去は？ 己は堪らなくなる。そういう時、己は、向うの山の頂の巖に上り、空谷に向って吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。己は昨夕も、彼処で月に向って咆えた。誰かにこの苦しみが分って貰えないかと。しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮っているとか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持を分ってくれる者はない。ちようど、人間だった頃、己の傷つき易い内心を誰も理解してくれなかったように。己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない」(本文)とある。

*

*

では、その内容であるが、「……己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによって益々己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった」とある。——つまり、主人公の「李徴」という人は、次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚(不満や嘆き或いは怒りや恨みその他など)によって益々自分の内なる「臆病な自尊心」(それは「一方では自負心からおごり高ぶり、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自

分)を飼いふとらせる(さらに助長させる)結果になってしまった。そして、「……人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了ったのだ」とある。——つまり、人間は誰でも「猛獣使い」であり、その「猛獣」に当るのが、各人の「性情」(いわば性格)だという。自分の場合、この「尊大な羞恥心」、それは、外的には、自信(自負心)から尊大(おごり高ぶった強い態度)で人と接して、結果、人を傷つけ、一方、内面では、自分の「羞恥心」(それは「傷つきやすい心」を隠し持っていて、その「両方」のせいで、進んで師や詩友と交わり切磋琢磨して詩の才能をさらに磨き上げようと努力を怠ってしまった。そのような「尊大な羞恥心」こそが、まさに「猛獣」だったのだ。「虎」だったのだ。これが「……自分を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、自分の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えてしまったのだ」ということである。

そして、「……今思えば、全く、己は、己の有っていた僅かばかりの才能を空費してやった訳だ。人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと言先ばかりの警句を弄しながら、事実は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己の凡てだったのだ。己よりも遥かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者が幾らでもいるのだ。虎と成り果てた今、己は漸それに気が付いた」とある。——つまり、今思えば、自分は、自分の有っていた僅かばかりの才能(詩の才能)を空費してしまったのである。それは、一体、なぜか? それは、自分の「自尊心」(おごり高ぶり)と自分の「傷つきやすい心」(羞恥心)のせいであり、進んで師や詩友と交わり切磋琢磨して、その「才能」(僅かばかりの詩の才能)を自慢に思って、その「才能」(僅かばかりの詩の才能)を自慢に思って、その「才能」(僅かばかりの詩の才能)をさらに磨き上げようと努力を怠ってしまったからである。人生は何事をも為さぬには余りに長い、何事かを為すには余りに短いなどと言先ばかりの警句を弄しながら、実際は、才能の不足を暴露するかも知れないという「卑怯な危惧」(それを恐れる「自分の傷つきやすい心」と、刻苦を厭う「怠惰」(それは「進んで師や詩友と交わり切磋琢磨するという努力を怠ってしまったこと」)が、まさに「自分の凡て」だったのだ。自分よりも遥かに「乏しい才能」でありながら、それを「専一」(詩なら詩を徹底的)に磨き上げたがために、堂々たる「詩家」となった者が幾らでもいるのだ。「虎」(思いも寄らないような境遇へと陥ってしまった自分)と成り果てた今、自分は漸それに気が付いたのである。

そして、「……それを思うと、自分は今も胸を灼かれるような悔(後悔)を感じる。自分には最早人間としての生活は出来ない。たとえ、今、自分が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしても、どういふ手段で発表できよう。まして、自分の頭は毎日に虎に近づいて行く。どうすればいいのだ。自分の空費された過去は? 自分は堪らなくなる」とある。これは、例えば、深刻な病気や身体障害或いは痴呆症、老い、死、その他、どういふことであれ、自分の「努力」だけではどうにもならないような状況に追い込まれた時には、誰でも「たまらない気持ち」に追い込まれるのではないだろうか。そして、「……そういう時、(虎と変身してしまった)自分は、向うの山の頂の巖に上り、空谷(人気の

無い寂しい谷間) に向つて吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。自分は昨日の夕方も、彼処で月に向つて咆えた。誰かにこの苦しみを分つて貰えないかと。しかし、獣どもは自分の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂つて、哮つているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人『自分の気持』を分つてくれる者はない。ちよと、人間だった頃、自分の『傷つき易い内心』を誰も理解してくれなかつたように。自分の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではなく、それは、自分の涙のせいでもある」のだと。そして、この「章」は、一面では、「作者」(中島敦) という人の「心境」をも反映していることになるのだらう。

六、第六章

では、次は「最後の本文」であるが、それは、「……漸く四辺の暗さが薄らいで来た。木の間を伝つて、何処からか、暁角が哀しげに響き始めた。——最早、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、(虎に還らねばならぬ時が) 近づいたから、と、李徴の声を言つた。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。彼等は未だ號略に在る。固より、己の運命に就いては知る筈がない。君が南から帰つたら、己は既に死んだと彼等に告げて貰えないだらうか。決して今日のことだけは明かさなで欲しい。厚かましいお願だが、彼等の孤弱を憐れんで、今後とも道塗に飢凍することのないように計らつて戴けるならば、自分にとつて、恩倖、これに過ぎたるは莫い。

言終つて、叢中から慟哭の聲が聞えた。袁滲もまた涙を泛べ、欣んで李徴の意に副いたい旨を答えた。李徴の聲はしかし忽ち又先刻の自嘲的な調子に戻つて、言つた。

本当は、先ず、この事の方を先にお願ひすべきだったのだ、己が人間だったなら。飢え凍えようとすする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけているような男だから、こんな獣に身を墮すのだ。——そして、附加えて言うことに、袁滲からの帰途には決してこの途を通らないで欲しい、その時には自分が酔つていて故人を認めずに襲いかかるかも知れないから。又、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上つたら、此方を振りかへつて見て貰いたい。自分は今の姿をもう一度お目に掛けよう。勇に誇らうとしてはない。我が醜惡な姿を示して、以て、再び此処を過ぎて自分に会おうとの気持を君に起させない為であると。

袁滲は叢に向つて、懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上つた。叢の中からは、又、堪え得ざるが如き悲泣の聲が洩れた。袁滲も幾度か叢を振り返りながら、涙の中に出発した。

——そして、一行が丘の上についた時、彼等は、言われた通りに振り返つて、先程の林間の草地を眺めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失つた月を仰いで、二声三声咆哮したかと思つと、又、元の叢に躍り入つて、再びその姿を見なかつた」(完) とある。

*

*

さて、その「内容」であるが、それは、「……漸く四辺の暗さが薄らいで来た。木の間を伝つて、何処からか暁角(夜明けを告げる角笛の音)が哀しげに響き始めた。——最早、別れを告げねばならない。酔わねばならない時が、(虎に還らねばならない時が) 近づいたから」と、主人公「李徴」の聲が云つた。だが、お別れする前にもう一つ「頼み」があ

る。それは、我が「妻子」のことだ。彼等は未だ號略かくりやくにいる。固もとより、自分の運命（虎への変身）に就いては知る筈はずがない。君が南から帰ったら、自分は既に死んだと彼等に告げて貰もらえないだろうか。決して今日のことだけは明かさないうで欲しい。それは、一体、なぜか？ それはもちろん、妻子に「余計な心配をかけたたくない」ためであるが、もう一つは、自分の惨めな境遇を知られたくないという「自尊心」もあるのかも知れない。そして、厚かましいお願いだが、彼等の「孤弱」（弱々しく身寄りがないこと）を憐あわれんで、今後とも道塗どうと（道ばた）に飢凍きとう（飢え凍えること）のないように計らって戴いたけるならば、自分にとつて、恩倖おんこう（特別な寵愛）、これに過ぎたるは莫ない、と云うのであった。

言い終つて、叢の中から慟哭れんきつ（声を上げて泣く）声が聞えた。袁滲えんさんもまた涙を泛うかべ、欣よろこんで李徴りちようの意に副そいたい旨むねを答えた。その「願い」が快く受け入れられたので、主人公の「李徴」は、再び、その「心の解放感」から、李徴りちようの声を忽たちまち又先刻の自嘲的な調子に戻つて云つた。「……本当は、先ず、この事の方を先にお願ねがいすべきだったのだ、自分が人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、自分の乏しい詩業の方を気にかけているような男だから、こんな獣けものに身を墮おとすのだ」とある。この「自嘲的な調子」（自分で自分をあざけるような調子）の中には、実は主人公「李徴」のいわば「本心」（心の声）も含まれているのだろう。そして、ここにこそ主人公「李徴」の「人間性の欠如が語られている」ことにもなるのである。それは、一体、どういうことかと言え、それは、主人公「李徴」という人は、まさに「……自分のことばかりにとらわれ過ぎていて、飢え凍えようとする妻子のこと（愛する『妻子の生活やその他のこと』）をあと回しにするような人間だからである」が、それがまた、主人公「李徴」の「詩」は、「……成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いないが、しかし、このままでは、第一流の作品となるには、何処どこか（非常に微妙な点に於て）欠けるところがあるのではないか」という理由の「一つの根拠」にもなっているのである。つまり、あまりにも自分のことばかりにとらわれ過ぎていて、いわば「人間性に欠けるところがある」ということである。

そして、附加つげくわえて言うことには（新たな「お願い」としては、一つは、「……袁滲の帰途には決してこの途みちを通らないで欲しい」ということ。なぜなら、その時には自分が酔つていて故人を認めずに襲いかかるかも知れないからである。そして、もう一つは、「……今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘のほに上ったら、此方こちらを振りかえつて見て貰もらいたい。自分は今の姿をもう一度お目に掛けよう。勇に誇ろうとしてではない。我が『醜悪な姿』を示して（ここでは自分の『自尊心』を捨てている心理状態であり、逆に言えば、叢くさむらにその身を隠していたのは、まだ『自尊心』がどこかに残つていた証拠であり）、以て、再び此処ここを過ぎて自分に会おうとの気持を君に起させない為である」と云うのであった。これは、親友「袁滲」への心からの「友愛」（友を大事に思い、友をあやまって食い殺すようなことの絶対のないようにという思いの心遣い）からである。

そして、「……袁滲は叢に向つて、懇ろねんじに別れの言葉を述べ、馬あがに上つた。叢の中から、又、堪たえ得ざるが如き悲泣ひきげ（悲しく泣く）声こゑが洩もれた。袁滲も幾度か叢を振り返りながら、涙の中に出発した。——そして、一行が丘の上についた時、彼等は、言われた通りに振返つて、先程の林の間の草地を眺ながめた。忽たちまち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失つた月を仰いで、一声三声咆哮ほうこう（吠え猛つた）

かと思うと、又、元の叢に躍り入って、再びその姿を見なかった」（本文・完）とある。さて、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出て、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮（ほろろ）（吠え猛った）とある。——それでは、その「二声三声」にはいったいどのような「思い」が込められていたのだろうか？ まず、考えられることは、自分を「虎」としてむやみに畏れるのではなく、むしろ「人間」として素直に受け入れてくれたことに対する「感謝の気持ち」、それに加えて、自分の「願い」を素直に聞き入れてくれたこと、一つは、「……部下に命じ、筆を執って叢の中から朗々と響いた詩を書きとらせた。長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである」とある。これによって、自分の「詩」が後代に残る可能性が出て来たということである。そして、もう一つは、厚かましいお願いだが、妻子の「孤弱」（弱々しく身寄りがないこと）を憐れんで、今後とも道塗（道ばた）に飢凍（飢え凍えること）のないように計らって戴けるならば、自分にとってこれに過ぎたる恩俸（特別な寵愛）はないとし、袁滲は、それを快く受け入れてくれたこと、それらに對する「感謝の気持ち」である。そして、もう一つは、再び、二度と会うこともないだろう、李徴にとつて、この世でのたつた一人だけの「親友」であった「袁滲」との「永遠の別れ」、その「惜別の想い」などが深く込められていたということになるのだろう。そして、再び、人々の前にその「姿」を現わすことはなかったということである。

七、結び

さて、主人公の「李徴」という人は、なぜ、虎へと変身してしまったかの「理由」付けとしては、まず、原典の『人虎伝』という作品の中では、「……隴西の李徴は、皇族の子であり、博学で、立派な詩も書き、天宝十年、科挙に合格をして、やがて江南尉になつてゐる。それゆえ、自尊心も高く、性格も荒っぽく、才能を恃んで倨傲（おごり高ぶり）、低い官職に屈する（甘んずる）ことができず、つねに鬱鬱（不平不満）を抱いて樂しまず、同じ役所の会合で、酒宴もたけなわになるといつも、私が君たちの仲間になれるだろうか、と言つていたので、同僚の人たちからは、憎まれていたのである。こういう「性格」が、いわば「虎」へと変身する一つの「要因」にもなつてゐるのだろう。そして、もう一つの「理由」付けとしては、「……南陽の郊外に於いて、かつて一孀婦に私す。其の家窃かに之を知り、常に我を害する心有り。孀婦は是に由りて再び合ふを得ず。吾因りて風に乘じて火を縦ち、一家数人、尽く之を焚き殺して去る。此れを恨みと為すのみ」とある。その「内容」は、「……かつて私は南陽の郊外で一人の未亡人と密通をしていた。その家の人は窃かにそのことを知つて、いつも私を殺害しようとしていた。未亡人は、これにより（私と）二度と会うことはできなかつた。そのために、私は、風に乗じて家に火を放つて、一家数人すべて焼き殺して逃げたのである。このことを残念に思うのみ」という内容になつてゐる。これは、一家数人すべて焼き殺すという人間として極めて「非道かつ残酷な行為」であり、その「報い」として、いわば「虎」へと変身してしまつたという、そういう、いわば「因果応報」的な内容になつてゐるかと思う。

一方、中島敦の『山月記』の中の主人公「李徴」という人は、まず、皇族の子ではなく、むしろ「一般人」に設定を変えている。それは、一体、なぜか？ それは、特定の「人

間(皇族)ではなく、多くの人たちにあてはまる「物語」に設定し直しているのである。次に、『山月記』の「李徴」という人は、詩人として「名を残す」ことが、何よりも「第一の願い」であり、それは、まさに「……詩家としての名を死後百年に遺そうとした」とある通りである。そのためにこそ、主人公の「李徴」という人は、「……地方の役人の職を辞して、故郷に帰り、人との交わりを絶って、ひたすら詩作に耽った」ということである。ところが、道なかなばで発狂して「虎」に変身してしまった。しかし、かつて生み出した「詩」の数は百篇あり、その中に、今でも覚えている詩が数十ある。これを我が為に「伝録」(記録し伝えて)「頂きたいというのが、主人公「李徴」の心の底からの「願い」であり、それは、財産を破綻させ、妻子に貧窮の「苦しみ」まで味わせ、さらにわが身の心まで「狂わせ」(発狂させるまで)「自分が生涯それに執着したところのもの、つまり、すべてを投げ捨ててまでひたすら詩作に耽って生み出した詩数百篇、その一部なりとも後代に伝えないでは、(自分ももう)死んでも死に切れない」という想いなのである。

そして、もう一つ、原典の『人虎伝』とその内容が全く全然違っているのは、一体、何かと問えば、それは、なぜ、自分は「虎」へと変身したかの「理由」付けであるが、まず、その前に、次のようなことを云っている。それは、「……全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になったのだろう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取って、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ」とあるが、これは、これで「正しい考え方」であり、それは、人間が「虎」へと変身するという「奇つ怪な出来事」は、まさに「人智を遙かに超越している」ものであり、それゆえ、本来、その「理由は厳密には分からない」とするのが、まさに「最も正しい答え」になるのである。それはともかく、主人公の「李徴」という人は、やがて、「……何故こんな運命になったか判らぬと、先刻は言ったが、しかし、考えように依れば、思い当ることが全然ないでもない」と云って、自分なりの「理由」付けをするが、その「理由」付けこそは、まさに「作者」(中島敦)の「考え方」(つまり「中島敦自身」)が最もはつきりと表れている部分になるのである。

それでは、その「内容」であるが、それは、次のように「告白」しているのである。つまり、「……何故こんな運命になったか判らぬと、先刻は言ったが、しかし、考えように依れば、思い当ることが全然ないでもない。人間であった時、己は努めて人との交を避けてきた」とある。人々はそれを「倨傲だ、尊大だ」と言ったが、しかし、実際は、それが殆ど「羞恥心」に近いものであったと、素直に告白しているのである。つまり、「羞恥心」から、まさに多くは「人との交を努めて避けてきた」ということである。この「羞恥心」というのは、まさに「警戒心や恐怖心」などから生じて来るものであり、また、例えば、それは、どういうことであれ、自分の「……容姿・容貌、身分、家柄、学歴、職歴、収入、年齢、能力、成績、言動、境遇、結果、その他」、何であれ、それが劣っていると感じるような時には、いわば「恥ずかしいと思う気持ち」(或いは一種の「劣等感」)などが生じやすくなると共に、そのような「羞恥心」というものは、その人が積極的に「活動」(言動)することや、また、人と積極的に交わることなどを妨げる「一つの要因」にもなり得るが、また、一方では、「……不平、不満、怒り、嫌悪、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」の感情を生み出す「一つの要因」にもなり、また、時には「過激な行動」(言

動)などへと駆り立てる、「一つの要因」にもなり得るものである。——つまり、われわれ人間というのは、結局、誰であれ、多かれ少なかれ、自分が「傷つくこと」を何よりも恐れているのである。——もちろん、郷里の鬼才(秀才)といわれた自分に、自尊心が無かつたとは云わない。しかし、それは「臆病な自尊心」とでもいうべきものであった。

では、その余りに有名な「臆病な自尊心」という言葉であるが、この「言葉」をもつと分かりやすく表現し直せば、それは、まさに「一方では自尊心からおごり高ぶり、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自分」ということであり、例えば、主人公の「李徴」という人も、まさに「一方では自尊心からおごり高ぶり、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自分」から、まさに「人との交を努めて避けてきた」ということになるのである。また、もう一つの「尊大な羞恥心」という言葉も、その「言葉」をもつと分かりやすく表現し直せば、それは、まさに外的には、自信(自尊心)から尊大(おごり高ぶった強い態度)を見せながら、一方、内面では、自分の「羞恥心」(それは「傷つきやすい心」)をも隠し持っていて、そのために、主人公の「李徴」という人は、「……己は詩によって名を成そうと思いつながら(一流の詩人になろうと志を立てながら)、進んで師に就いたり、求めて詩友と交って切磋琢磨するような努力を怠ってしまった。かといって、又、己は俗物の間に伍する(それは「こんな俗物や凡才な人たちと交わり仲間となる」)ことも潔しとしなかった(自分の自尊心が許さなかった)。共に、我が「臆病な自尊心」(それは「一方では自尊心からおごり高ぶり、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自分」と、「尊大な羞恥心」(それは「自信《自尊心》からおごり高ぶった尊大な態度を見せながらも、自分の心の中にはいつも傷つきやすい羞恥心も同時に隠し持っていた」)所為である。己の珠に非ざることを(自分には詩の才能がないのではないかと)惧れるが故に、敢て刻苦して磨こうとせず(進んで師や詩友と交わり切磋琢磨して詩の才能をさらに磨き上げようとする努力を怠り)、(その結果、真に傑出した詩家とはなり得なかった)。又、己の珠なるべき(自分には詩の才能があること)を半ば(半分は)信ずるが故に(その自尊心から)、まさに「おごり高ぶり」、碌々として瓦に伍すること(同じく「こんな凡庸・凡才な人たちと交わり、仲間となること」)も自分にはどうしても出来なかつたということである。

そして、主人公の「李徴」という人は、次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚(不満や嘆き或いは怒りや恨みその他)などによって益々自分の内なる「臆病な自尊心」(それは「一方では自尊心からおごり高ぶり、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自分」)を飼いふとらせる(さらに助長させる)結果になつてしまった。そして、自分の場合、一つは、その「臆病な自尊心」と、もう一つは、「尊大な羞恥心」こそ、それは、外的には、自信(自尊心)から尊大(おごり高ぶった強い態度)で人と接して、結果、人を傷つけ、一方、内面では、自分の「羞恥心」(それは「傷つきやすい心」)を隠し持っていて、その「両方」のせいで、進んで師や詩友と交わり切磋琢磨して、その「才能」(僅かばかりの詩の才能)を自慢に思つて、その「才能」(僅かばかりの詩の才能)をさらに磨き上げようとする努力を怠ってしまった。そのような「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」こそ、まさに「猛獣」だったのだ。「虎」だったのだ。これが「……自分を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、自分の外形をかくの如く、内心にふさわしいもの

に変えてしまったのだ」と云うのである。

そして、もう一つの「虎」への変身の「理由」付けとしては、わが「妻子」のことを親友の「袁滲^{えんさん}」にお願いしたあと、主人公の「李徴^{りちよう}」という人は、自嘲的な調子で、「……本当は、先ず、この事の方を先にお願ひすべきだったのだ、自分が人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、自分の乏しい詩業の方を気にかけているような男だから、こんな獣^{けもの}に身を随^{おと}すのだ」とある。そして、ここにこそ主人公「李徴^{りちよう}」の「人間性の欠如が語られている」ことにもなるのである。それは、一体、どういうことかと言えば、それは、主人公「李徴^{りちよう}」という人は、まさに「……自分のことばかりにとらわれ過ぎていて、飢え凍えようとする妻子のこと（愛する『妻子の生活やその他のこと』）をあと回しにするような人間だからである」が、それがまた、主人公「李徴^{りちよう}」の「詩」は、「……成程^{なるほど}、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いないが、しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、何処^{どこ}か（非常に微妙な点に於^{おい}て）欠けるところがあるのではないか」という理由の「一つの根拠」にもなっているのである。

*

*

山月記
(参考文献)

隴西の李徴は博學才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。いくばくもなく官を退いた後は、故山、號略に帰臥し、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴は漸く焦躁に駆られて来た。この頃からその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒らに炯々として、曾て進士に登第した頃の豊頬の美少年の儼は、何処に求めようもない。

数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のために遂に節を屈して、再び東へ赴き、一方官吏の職を奉ずることになつた。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。曾ての同輩は既に遙か高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかつたその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の僞才李徴の自尊心を如何に傷つけたかは、想像に難くない。彼は快々として樂しまず、狂悖の性は愈々抑え難くなつた。一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿つた時、遂に発狂した。或夜半、急に顔色を変えて寢床から起上ると、何か訳の分らぬことを叫びつつそのまま下にとび下りて、闇の中へ駈出した。彼は二度と戻つて来なかつた。附近の山野を搜索しても、何の手掛りもない。その後李徴がどうなつたかを知る者は、誰もなかつた。

翌年、監察御史、陳郡の袁滲という者、勅命を奉じて嶺南に使し、途に商於の地に宿つた。次の朝未だ暗い中に出発しようとしたところ、馱吏が言うことに、これから先の道に人喰虎が出る故、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、今少し待たれたが宜しいでしょうと。袁滲は、しかし、供廻の多勢なのを待み、馱吏の言葉を斥けて、出発した。残月の光をたよりに林中の草地を通つて行つた時、果して一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、あわや袁滲に躍りかかると見えたが、忽ち身を翻して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の声で『あぶないところだつた』と繰返し、咄くのが聞えた。その声に袁滲は聞き憶えがあつた。驚懼の中にも、彼は咄嗟に思いあたつて、叫んだ。『その声は、我が友、李徴子ではないか？』袁滲は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少かつた李徴にとつては、最も親しい友であつた。温和な袁滲の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかつたためであらう。

叢の中からは、暫く返辞が無かつた。しのび泣きかと思われる微かな声が時々洩れるばかりである。ややあつて、低い声が答えた。『如何にも自分は隴西の李徴である』と。

——袁滲は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久闊を叙した（久し振りに会つて話をした）。そして、何故叢から出て来ないのかと問うた。李徴の聲が答えて云う。自分は今や異類（虎）の身となつてゐる。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつ又、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起させるに決つてゐるからだ。しかし、今、凶らずも故人に遇うことを得て、愧赧の念（恥じて顔を赤らめる気持ち）をも忘れる程に懐かしい。どうか、ほんの暫くでいいから、我が醜悪な今の外形を厭わず、曾て君の友李徴であつたこの自分と話を交してくれないだろうか。

後で考えれば不思議だつたが、その時、袁滲は、この超自然の怪異を、実に素直に受容

れて、少しも怪もうとしなかった。彼は部下に命じて行列の進行を止め、自分は叢の傍に立って、見えざる声と対談した。都の噂、旧友の消息、袁滲が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかった者同志の、あの隔てのない語調で、それ等が語られた後、袁滲は、李徴がどうして今の身となるに至ったかを訊ねた。草中の声は次のように語った。

今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊った夜のこと、一睡してから、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の中から頻りに自分を招く。覚えす、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走っていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行った。気が付くと、手先や肱のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となっていた。自分は初め眼を信じなかった。次に、これは夢に違いないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあったから。どうしても夢でないと悟らねばならなかった時、自分は茫然とした。そうして懼れた。全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になったのだろうか。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取って、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きものさだめだ。自分は直ぐに死を想うた。しかし、その時、眼の前を一匹の兎が駆け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の人間が目を覚ました時、自分の口は兎の血に塗れ、あたりには兎の毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であった。それ以来今までにどんな所行をし続けて来たか、それは到底語るに忍びない。

ただ、一日の中に必ず数時間は、人間の心が還って来る。そういう時には、曾ての日と同じく、人語も操れば、複雑な思考にも堪え得るし、経書の章句を誦んずることも出来る。その人間の心で、虎としての己の残酷な行のあとを見、己の運命をふりかえる時が、最も情なく、恐しく、憤ろしい。しかし、その、人間にかえる数時間も、日を経るに従って次第に短くなって行く。今までは、どうして虎などになったかと怪しんでいたのに、この間ひよいと気が付いて見たら、己はどうして以前、人間だったのかと考えていた。これは恐しいことだ。今少し経てば、己の中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋れて消えて了うだろう。ちようど、古い宮殿の礎が次第に土砂に埋没するように。そうすれば、しまいに己は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い廻り、今日のように途で君と出会っても故人と認めることなく、君を裂き喰うて何の悔も感じないだろう。一体、獣でも人間でも、もとは何か他のものだったんだらう。初めはそれを憶えているが、次第に忘れて了い、初めから今の形のものであったと思ひ込んでいたのではないか？ いや、そんな事はどうでもいい。己の中の人間の心がすっかり消えて了えば、恐らく、その方が、己はしあわせになれるだろう。だのに、己の中の人間は、その事を、この上なく恐しく感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思っているだろう！ 己が人間だった記憶のなくなることを。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上になった者でなければ。ところで、そうだ。己がすっかり人間でなくなつて了う前に、一つ頼んで置きたいことがある。

袁滲はじめ一行は、息をのんで、叢中の声の語る不思議に聞入っていた。声は続けて言う。——他でもない。自分は元來詩人として名を成す積りでいた。しかも、業未だ成らざるに、この運命に立至った。曾て作るところの詩数百篇、固より、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在も最早判らなくなつていよう。ところで、その中、今も尚記誦せるものが数十ある。これを我が為に伝録して戴きたいのだ。何も、これに仍つて一人前の詩人面をしたのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死に切れないのだ。——袁滲は部下に命じ、筆を執つて叢中の声に随つて書きとらせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁滲は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠けるところがあるのではないかと。

旧詩を吐き終つた李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るが如くに言った。羞しいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、己は、己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれていた様を、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわつて見る夢にだよ。嗤つてくれ。詩人に成りそこなつて虎になつた哀れな男を。（袁滲は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いていた）。そなた。お笑い草ついでに、今の懐いを即席の詩に述べて見ようか。この虎の中に、まだ、曾ての李徴が生きているしるしに。袁滲は又下吏に命じてこれを書きとらせた。その詩に言う。

偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵 當時声跡共相高

我為異物蓬茅下 君已乘軺氣勢豪

此夕溪山對明月 不成長嘯但成皁

偶因狂疾に因りて殊類と成る

今日の爪牙 誰か敢て敵せん

我異物と為りて 蓬茅の下

此の夕べ 溪山 明月に對し

災患相仍つて 逃るべからず

當時の聲跡 共に相高し

君已に軺に乗じて 氣勢豪なり

長嘯を成さず 但だ皁を成す

たまたま心を病んで狂気となるにより、けものになつてしまつた。いろいろな災患が重なり、この運命から逃れることができない。

爪や牙を持つ虎の身となつた今では、誰が敢えて刃向かうだろうか。当時、あの頃の二人の評判は、ともに秀才として讃えられたものだ。ところが、今、自分はけもの身となつて草むらに隠れ、

君はすでに出世して車に乗り、その権勢は頗る高いものがある。

この夕べ、谷川や山々を明るく照らす満月に向き合ひ、

自分は詩を吟ずることなく、ただ悲しく吠え叫ぶのみである。

時に、残月、光冷やかに、白露は地に滋く、樹間を渡る冷風は既に曉の近きを告げていた。人々は最早、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄倖を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

何故こんな運命になったか判らぬと、先刻は言ったが、しかし、考えように依れば、思い当ることが全然ないでもない。人間であった時、己は努めて人との交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといった。実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。勿論、曾ての郷党の鬼才といわれた自分、自尊心が無かったとは云わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいうべきものであった。己は詩によつて名を成そうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。かといつて、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。己の珠に非ざることを懼れるが故に、敢て刻苦して磨こうとせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかつた。己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによつて益々己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になつた。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だつた。虎だつたのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了つたのだ。今思えば、全く、己は、己の有つていた僅かばかりの才能を空費して了つた訳だ。人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、事實は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己の凡てだつたのだ。己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもいるのだ。虎と成り果てた今、己は漸くそれに気が付いた。それを思うと、己は今も胸を灼かれるような悔を感じる。己には最早人間としての生活は出来ない。たとえ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作つたにしても、どういふ手段で発表できよう。まして、己の頭は毎日に虎に近づいて行く。どうすればいいのだ。己の空費された過去は？ 己は堪らなくなる。そういう時、己は、向うの山の頂の巖に上り、空谷に向つて吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。己は昨夕も、彼処で月に向つて咆えた。誰かにこの苦しみを分つて貰えないかと。しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂つて、哮つているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持を分つてくれる者はない。ちやうど、人間だつた頃、己の傷つき易い内心を誰も理解してくれなかつたように。己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。

漸く四辺の暗さが薄らいで来た。木の間に伝つて、何処からか、暁角が哀しげに響き始めた。——最早、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、(虎に還らねばならぬ時が)近づいたから、と、李徴の声が言つた。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。彼等は未だ號略にいる。固より、己の運命に就いては知る筈がない。君が南から帰つたら、己は既に死んだと彼等に告げて貰えないだろうか。決して今日のことだけは明かさないうで欲しい。厚かましいお願だが、彼等の孤弱を憐れんで、今後とも道塗に飢凍することのないように計らつて戴けるならば、自分にとつて、恩倖、これに過ぎたるは莫い。

言終つて、叢中から慟哭の聲が聞えた。袁滲もまた涙を泛べ、欣んで李徴の意に副いたい旨を答えた。李徴の聲はしかし忽ち又先刻の自嘲的な調子に戻つて、言つた。

本当は、先ず、この事の方を先にお願ひすべきだったのだ、己が人間だったなら。飢え凍えようとすする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を氣にかけているような男だから、こんな獣に身を墮すのだ。——そして、附加えて言うことに、袁滲からの帰途には決してこの途を通らないで欲しい、その時には自分が酔つていて故人を認めずに襲いかかるかも知れないから。又、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上つたら、此方を振りかえつて見て貰いたい。自分は今の姿をもう一度お目に掛けよう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜惡な姿を示して、以て、再び此処を過ぎて自分に会おうとの氣持を君に起させない為であると。

袁滲は叢に向つて、懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上つた。叢の中からは、又、堪え得ざるが如き悲泣の聲が洩れた。袁滲も幾度か叢を振り返りながら、涙の中に出発した。

——そして、一行が丘の上についていた時、彼等は、言われた通りに振り返つて、先程の林間の草地を眺めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失つた月を仰いで、二声三声咆哮したかと思つと、又、元の叢に躍り入つて、再びその姿を見なかつた。(完)

*

*

「参考文献」

※底本「山月記」中島敦（「青空文庫」）